

いなかおか 8



1999 No.135

東京都世田谷区歯科医師会会報



東南アジア旅行の知的楽しみ方

「インド化」された国々へ 遺跡の旅-VII

下馬部会 斎藤賢一

前回は東南アジア寺院のルーツを求めて、北インドへ旅行しました。今回は南インドへ行きます。まず南インドの玄関、タミルナード州の州都マドラスへ行きましょう。マドラスは大会で英国植民地の重要な拠点でしたので、町の至る所に英国風の建物が残っています。まず気が付くことは、人々の顔が北インドの人々の顔とは違うことです。北のアーリア系の顔ではなく鼻が低く肌の色が黒い土着のドラヴィタ系の顔です。もちろん言葉も全く違います。大きな町では公用語である北のヒンドゥー語や英語が通じますが、地方へ行ったら全く通じませんので、同じインド人でも北の人々は私たちと同じ外国人になってしまいます。したがって同国人にもかかわらず観光の際にはヒンドゥー語のガイドがつかます。

まず初めに訪れるのは7世紀のパラヴァ朝の重要な港として栄えたマハバリープラムです。マドラスから車で1時間半でつかます。とても小さな村ですがここに7～8世紀の三つのタイプの寺院建築があります。花崗岩をくり貫いて造った岩石寺院、石を積み重ねて造った石積寺院、そして石窟寺院です。マハバリープラムの丘には多くの石窟寺院（ここではマンダバという）が点在し、そこには興味深い神話（遺跡の旅-II参照）が浮き彫りされています。

特に見応えのあるマンダバはヴァラーハ・マンダバで岩を削って正面にパラヴァ朝のシンボルの獅子に支えられた柱をもうけ、内部の壁にはヴィシュヌの「野猪の化身-ヴァラーハ」と「矮人-ヴァーマナ」が彫刻されています（写真-1、2）。

マヒヤスラマルディニー・マンダバは「水牛の姿をしたアスラを殺すドゥルガー女神」、



写真-1 「石窟寺院」ヴァラーハ・マンダバ



写真-2 「野猪の化身」ヴァラーハ・マンダバ



写真-3 「水牛の姿をしたアスラを殺すドゥルガー女神」マヒヤスラマルディニー・マンダバ

「アナタ龍の上に横たわるヴィシュヌ」の素晴らしい彫刻があります（写真-3）。

これらの彫刻は東南アジアの寺院でもよく用いられるモチーフです。

五つのラタと呼ばれる岩石寺院は大きな石を彫って造ったもので、南インド建築の初期の色々な形をそれぞれに表しており非常に重要です(写真-4)。名前は叙事詩の「マハーバーラタ」の主人公から取っています。



写真-4 五つのラタ 左から「ドラウパティー・ラタ」「アルジュナ・ラタ」「ビーマ・ラタ」「ダルマラージャ・ラタ」「サハデーヴァ・ラタ」

「ドラウパティー・ラタ」は現在でもベンガルなどで見られる竹造りの屋根を模したもので土着的な祠堂の形を伝えます。

「アルジュナ・ラタ」と「ダルマラージャ・ラタ」はそれぞれ3層及び4層からなり、南型の高塔建築の原型を示しています(写真-5)。



写真-5
ダルマラージャ・ラタ

「ビーマ・ラタ」は切妻のカマボコ型の屋根をのせ、楼門建築の原始型といわれています(写真-6)。

「サハデーヴァ・ラタ」は前方後円型で、仏教のチャイティヤ堂を思わせます。このうち「アルジュナ・ラタ」と「ダルマラージャ・ラタ」は中部ジャワの初期ヒンドゥー寺院と非常によく似ています。



写真-6 ビーマ・ラタ

マハバリープラムで特に有名なのが「ガンガー川の下流-アルジュナの苦行」と言われる幅26m、高さ9mの岩壁に刻まれた彫刻で、天空を流れていたガンジス川が地上に流れるようになったというヒンドゥー神話が題材になっており、神々、天人、色々な動物が彫刻されています(写真-7)。



写真-7 「ガンガー川の下流」

海岸寺院はパッラヴァ朝最初の石積寺院で五つのラタの「ダルマラージャ・ラタ」を大きくした形で重層ピラミッド型の南型高塔形式がはっきりしています(写真-8)。



写真-8 海岸寺院

海岸に建っているため風化が著しい寺院です。ここの港から東南アジアへ、また東南アジアからこの港に色々な人々が行き来したと思われる。当時の灯台に使った建物も丘の上に残

っています。小さい町なのでこれらの遺跡をすべて見学しても一日で充分です。ほとんどのツアーがマドラスからの日帰りですが、よいホテルもありますしフードもとてもおいしく、なにより夕日に照らされた海岸寺院が最高ですから、是非ここで一泊してください。

次にパッラヴァ朝の王都カンチープラムへ行きます。カンチープラムはヒन्दウー教7大聖地の一つで、現在も200以上の寺院があります。マドラスから車で2時間で行きます。ここでの必見はカイラーサナータ寺院とヴァイクンタペルマール寺院です。

カイラーサナータ寺院はパッラヴァ朝のナラシンハ・ヴァルマン王によって建立されたシヴァ派の寺院で、カイラーサというのはシヴァ神の住居である聖山のことで、海岸寺院とはほぼ同じ頃に建てられ、形はよく似ていますがこちらは保存状態が良く本殿と前殿から成っており、これらの壁にはシヴァ神の色々な彫刻があり、周囲は小堂をつけた周壁によって囲まれています(写真-9)。



写真-9
カイラーサナータ寺院

注目すべきは入り口の楼門で五つのラタの「ピーマ・ラタ」によく似ています。この楼門が10世紀以降南インドでは次第に巨大化して40~50m以上の高さになります。ここカンチープラムにも13世紀以降の巨大な楼門を持った寺院がいくつもあります(写真-10)。

もう一つのヴァイクンタペルマール寺院もほぼ同じ時期に建立され、こちらはヴィシュヌ神を祀っています。ヴァイクンタとはヴィシュヌ

神の住まいがあるところです。やはり本殿と前殿から成り、壁の至る所にヴィシュヌ神話が彫刻されています(写真-11)。



写真-10「楼門」エカンパレーシユヴァアラ寺院



写真-11 ヴァイクンタペルマール寺院

本殿は3階建てになっており、一人がやっと通れる階段を登ると二階のバルコニーにでられ上部の彫刻が間近に見られます。この寺院で特に重要なのは本殿と前殿を囲む壁の内側に建立当時の歴史記録が浮き彫りされており、当時の人々の暮らしを偲ばせています(写真-12)。



写真-12「浮き彫り」ヴァイクンタペルマール寺院

アンコールのバイヨン寺院の回廊にもその時代の記録が彫刻されており、当時の人々の生活がよくわかりとても貴重です。

南インドはベジタリアンが多いのですが、特にカンチープラムはどこへ行ってもベジタリアンのレストランばかりです。このベジタリアンについて少しお話したいと思います。インドのヒンドゥー教徒はウシは食べないがトリは食べる人がいます。ウシとトリは食べないが魚や卵を食べる人がいます。これらは食べないがチーズやバターは食べる人がいます。そして野菜しか食べない人がいます。さらに野菜でも根菜は食べず、葉っぱしか食べない人がいます。ヒンドゥー教徒なのでウシは絶対食べませんが、なにを食べてなにを食べないかは自分自身の問題なので強制されるものではないし、強制もしません。身分の高い人ほど厳しく自分を規制しているみたいです。また1週間、1カ月、1年だけ願掛けして規制する場合もあります。

インドの飲み物と言えばチャイ（ミルクティー）を想像しますがこれは主に北インドで南インドではコーヒーを飲みます。これがまたとても美味しいのです。また主食はチャパティやナンと思われがちですがこれも主に北で南ではお米で正真正銘のインディカ米です。インドのお米はほとんど南でとれますので、南インドの風景は田圃と椰子の木と寺院の高い楼門です。

またカンチープラムはベナレスと並んでインド有数のサリーの産地で、全国からサリーを買いにきます。たまたま地方からサリーを買いに来た一家を観察していたのでそのお話をします。家族構成は父親、母親、娘、その婚約者の4人でインドでは嫁入り道具として20～30枚のサリーを持たせます。普段着、外出用、冠婚葬祭用、などでまず70～80枚を選び出します。このときは母親と娘の二人で選び男は見ているだけです。次にこの中から40～50枚にしぼります。もちろん店の中はぐちゃぐちゃになっています。ここまでは比較的早く選べますが、ここからが大変です。半分にするのですがまず婚約者が口を挟みます。そしてなんとか20～30枚になると父親の出番です。一枚一枚値段を確かめて

お金の交渉が始まります。店もマネージャーや社長が出てきてお互いに計算機をたたきあいます。そして値段があわなければサリーを減らしていきます。最終の金額が決まると父親はアタッシュケースをあけ、中から輪ゴムで止めてあるお札を何束もだし、お互いに数えます。小額紙幣のために数えるのが大変です。全員ぐったりしていますが満足感が漂っています。見ている私はくたくたです。おそらくこの家族は中流階級の人だと思います。

今回南型の寺院を見学して東南アジアの寺院との関係として、5つのラタのうち「アルジュナ・ラタ」と「ダルマラージャ・ラタ」が初期のインドネシア寺院によく似ていましたがそのほかの影響はよくわかりませんでした。前回の北型と今回の南型で一応8～12世紀のインド建築を見てきましたがインドのどこの地域の建築が特に影響を与えたかということはわかりませんが、インド全域から少しずつ影響を受けていることはわかりました。共通事項としては、彫刻の題材、文様などがありますがアンコールワットやバイヨンなどを中心とするアンコール遺跡や中部ジャワ遺跡は東南アジア独特のものと考えられます。遺跡の旅-Iでお話したようにおそらく早い時期からインドとの交流があり、共通の下地があったためヒンドゥー教や仏教がすんなり受け入れられ、当然インドの建築書も建築家や彫刻家とともに入ってきたと思われます。建築においてはおもしろいことにインドよりも建築書のルールにきちんと従っているようです。ほとんどの東南アジアの寺院建築は正確に東を正面としており池や外壁を建築書に従って造っています。そしてアジア各地の土着の信仰や生活様式が混ざりあいの独特の建築が生まれ、彫刻でもその地方独特の形が出来たと思われます。そしてその時代に出現した天才建築家や芸術家によってアンコールワットやバンティアイスレイなどの至宝の建築が生まれたのです。